

氏名	セキ 関 谷 理 オサム
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第400号
学位授与年月日	平成25年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉寂寥感の残滓 〈作品〉garden（庭） 他

論文等審査委員

（主査）	東京芸術大学	教授	（美術学部）	齋藤典彦
（論文第1副査）	〃	〃	（ 〃 ）	佐藤道信
（作品第1副査）	〃	准教授	（ 〃 ）	植田一穂
（副査）	〃	教授	（ 〃 ）	関出

（論文内容の要旨）

鄙びた風景の中に潜む、土着の寂寥感。多くの人々が持つ日本の牧歌的郷愁のイメージとは違う、風土に内在する混沌とした澱。本論文は、風景から私が感じたこれらの雰囲気や土着の寂寥感を「土着の寂寥感」と定義し、自らの経験を踏まえて考察するものである。そして、慣習やしきたりといったものが希薄になりつつある現代の社会において、なお風土に色濃く残るその澱の残滓が自身にいかにかに投影され作品制作に影響を与えたか、そのモチーフとしての外形を探りながら自身の作品へと変換する過程を論じた。

まず、風景に「土着の寂寥感」を感じた理由として、私の出自について述べたい。私は、新潟の山間部で幼少期を過ごした。典型的な過疎化の進む寒村である。茅葺屋根、土間、稲刈りの際に使用されるはざ、練炭の炬燵。風景のみを垣間見れば、その通り自然に囲まれた世界である。しかし、それと実際に生活することとは違う。

特に冬の間は外界から遮断される隔離された世界の中で、そこに住む人々は、共同体意識をもち、助け合って生活をしてきた。その一方で、個を尊重するプライバシー意識は希薄で、そこは常に周囲に監視されているような世界である。慣習やしきたりといったものが風土に根付いたその土地には、逃れられない宿命のようなものを背負いながら、密接な共同体意識のなかで構築された深い人間関係があった。

そのような、鄙びた風景からは想像しがたい現実が生み出す空気は、まるで暗鬱な暗闇のように、常に粘っこくそこに横たわっているように感じられた。そして、徐々に開かれた現代においても、その暗鬱な空気は残滓となって深くその土地に土着しているように感じられるのである。

その空気こそ、私の作品制作、作品の嗜好の根底にある源流である。それは「空気、水がきれいでも人が温かい」、「夕焼け小焼けの赤とんぼ」といった、牧歌的に美化されただけで語られてきた、日本の「郷里」の姿とは異なる。したがって、従来の日本画に多くみられる牧歌的風景画と、私の感覚との間にはずれが生じ、私はこのような作品に疑問をもつようになった。そして、風景に内在する「寂寥感」を「本質」として捉え、表現したいと考えるようになったのである。

また一方で、寂寥感の側面として「都市における寂寥感」にも言及した。私は、高校卒業と同時に東京へ出てきた。それは、過去から現代にいたるまで日本の多くの若者が辿った「慣習」「風習」「しきたり」「風土」といった土着性の強い土地柄から、集団社会のなかでその他多くの群衆に埋没し、共同体意識が薄れていくことで「個」が際立つ都会へと出てくる典型的な例のひとつであった。そこでの生活から見えてくる都会の風景は、かさついた、不安感や孤独感、解放感とがないまぜとなったもうひとつの実感の投影であった。

本論文では、「寂寥感の残滓」として、自身の幼少時の経験から醸成された曖昧模糊としたものに、都市の寂寥感を挙げることで、絵画制作におけるモチーフとしての外形を形成した。現代において、失われつつある田舎の風土は、私の中に澱のような粘着質と、光沢を持った、荒涼とした風景の記憶として残っている。私の中に根付いたその記憶の残滓は、私にどのように映り、自身の作品に影響したのかを考察しながら、絵画をより深みのある画面へと変換していく過程を論ずることを目的とした。

第一章では、私の現在の絵画制作において前提となった、私が育った村、家などの細かな具体的事象を紹介しながら、村における「家」と「庭」の役割や、その意味を、自身の経験を交えながら考察した。特にひとつの画面内、または作品間における統一した世界観を構築する上で、「閉ざされた世界」における生い立ちが、私の作品にどのような影響を及ぼしたのかを述べた。

第二章では、青年以降の生活の場である「都会」について、具体的な事象や自身の心境を交えながら、日本の生活における都会化によって何が変化していったのかを述べた。都市集中型の人口分布によって集合住宅が建てられていくなか、一方で過疎化した村々は廃村となった。知らない他人が多く暮らすなかで、都会の片隅にある自分の巣においてはプライバシーが守られるが、共同体意識が希薄で、一方で余計なしがらみは弱く、その地に土着する宿命をもたない人々ばかりである。そのような生活様式の変化が、人々の感情にどのような変化をもたらしたのかを考察した。

第三章では、「土着の寂寥感」を、表面的な風景の美しさや、牧歌的な雰囲気や隠れた、慣習やしきたりとその中で暮らす人々の感情と捉え、それをテーマとしながら芸術作品へと昇華した作品を紹介した。具体的には、文学、音楽、映像作品を例に挙げ、一般的に他者がいかに寂寥感を表現しているのかを比較検証することで、自身の実感からくる寂寥感を分析し、その本質を考察し、それを作品化することの客観的意義を探った。

第四章では、この「寂寥感」を、具体的に自身の作品にどのように取り入れたのか。またモチーフとして何を選択したのか、これにふさわしい具体的な技法や様式とは何かについて作例を挙げながら述べた。

(博士論文審査結果の要旨)

雪深い山間部の農村の「土着の寂寥感」と、都会の「茫漠たる寂寥感」。本論文は、その二つの寂寥感を経験し内包する筆者が、自らの作品に投影された「寂寥感の残滓」について論述したものである。

新潟の寒村に育った筆者の故郷の記憶は、牧歌的な豊かな自然ではなく、プライバシーの意識が希薄で慣習やしきたりが深い澱ようになった、宿命的な共同体の記憶である。一転して上京後に暮らす都会での生活は、解放感と浮遊する不安がないまぜになった寂寥感だった。この心理は、同じような体験を持つ人なら多かれ少なかれ理解できるものだろう。第1章ではその郷里での寂寥感、第2章で都会の寂寥感、第3章で筆者が芸術作品から感じる寂寥感、そして第4章で自作品について述べられている。

愛憎がなかばするような強いリアリティーで語られているのは、「土着の寂寥感」についての方である。筆者にとって良かれ悪しかれ根としてあるその感情は、作品に投影するというより否応なく投影されるものとしてある。第3章で筆者がとりあげている事例も、映画の「檜山節考」(1964年)や「砂の器」(1974年)など宿命を背負う人々の物語である。一方、都会の「茫漠たる寂寥感」の例としてあげているのは、楽曲の「東京砂漠」(1976年)や「大都会」(1979年)などだが、こうした事例の1960~70年代は、都市への人口集中と農村の解体が社会問題化した時期だった。

しかし筆者の作品自体は、抽象的な現代美術系の日本画であり、必ずしも「土着」的でも1960~70年代風のレトロな作品でもない。筆者自身が共感する音楽での「土着の寂寥感」としてあげているのも、むしろ1990年代以降の洋楽のロックであり、前述の事例との世代的なギャップが生じている。そのため審査会でも、作品と論文内容がどのように関係しているのかについての質問があった。そのポイントが、筆者が論文タイトルに使っている「残滓」の意味とイメージである。「残滓」の本来の意味は“のこりか

す”といった意味だが、ここでの意味はそれか、あるいは抽象化、純化、蒸溜化されたイメージか。

しかし筆者にとって最も重要なのは、そのどれであれ、むしろ寂寥感の直接的な表象ではなく、残滓となり抽象化されるまでの時間にあるようだ。彼が経験した郷里の生活と都会の生活は、いわば生活モデルとしての過去と現在であり、異質ながらその両者に通底する寂寥感を、現代絵画としての自作品の中に「残滓」として、つまりソフトとして描き込もうとしているのだといえる。

その方法論についてはやや論述不足の感があるものの、論述全体のリアリティーは強い。とくに筆者にとって否応のない「土着の寂寥感」の表現は、今後さらに変化、展開する可能性を窺わせる。学位論文として十分な内容として審査会の承認を得た。

(作品審査結果の要旨)

申請者は新潟県の山深い過疎化の進む山間部で幼少期を過ごした。今では珍しくなった、茅葺屋根が点在する風景……。そうした鄙びた風景からは想像しがたい現実が生み出す暗鬱な空気、そのような風土、生活習慣の中で過ごした経験が申請者の心に強い影響を与えた。高校生となり東京に出てきた後も、都会における孤独感や不安感といった暗鬱な空気感の中に「寂寥感」を感じ取っていく。その後、制作を続けていくうちに、申請者の作品の嗜好や、作品制作へと突き動かす原動力の根底にあるのはこの「寂寥感」であることに気づく。そしてこの「寂寥感」を「本質」として捉え、表現したいと考えるようになって行くのである。

提出された3点の作品は、いずれも風景をもとに制作されているが、抽象化されており、絵具を幾層にも塗り重ねた重厚な画面からは、表面を視覚でなぞるのではなく“身体で風景の内側を受けとめるような作品を描きたい”という、申請者の強い思いを感じる。現在申請者にとって「画面の抽象化」と「支持体」という二つの要素が、制作を行う上での大きな命題となっており、これは、実景をデフォルメし記号化することにより、実際の実景描写よりも多種多様な暗示を与えたい、という思いからくるものである。滲みや剥落といった不確定の要素を画面に持ち込むことで表現に幅を持たせ、抽象化することで鑑賞者の認識に時間的な隙間を生じさせ、「時間が流れる中で徐々に意識の中に入って行く」表現方法を模索している。いずれの作品からも、申請者が風景において表現したい“流れる時間”を感じ取ることができる。

技術と思索に裏打ちされ、高いレベルで作品を成立させたことを評価するとともに、今後の新たなる展開に期待したい。

審査会においては、審査員全員が申請者の一連の作品を高く評価し、学位に相応しい作品であると判断し合格とした。

(総合審査結果の要旨)

申請者の「crucify」という作品には、“磔にする”というタイトルどおり十字架を思わせる赤いXの形が繰り返し描かれている。この赤いXは、画面全体に塗られたアルミ泥により塗り残された下地である。下地全体には都市の日常の粘りつく時間が赤系の色彩で表現されている。同様に「garden」「sanctuary」においても、青色系の顔料で塗られた画面の下地には都市風景が描かれ、申請者が都市の象徴とするネオンの白い矩形が塗り残されている。このように申請者は、風景を再現的に描くのではなく、岩絵具によるデカルコマニーやその物質感を強調したマチエールを利用して抽象的にあらわそうとしている。

つまり申請者が描こうとしているのは、一瞬の視覚像として消費される風景画像ではなく、風景に刻印された過去の時間や人々の記憶との対話そのものである。それは申請者のいう「寂寥感」＝風土・家・母胎との分離であり、あるいは存在することへの恐れ、悲しみでもある。それを申請者は作品＝「残滓」

へと変容させようとする。なかでも「crucify」での、実景をデフォルメし記号化することにより、実際の実景描写よりも多種多様な暗示を見る者に与えようとする試みは高く評価された。

論文においては、新潟の山間部で幼少期を過ごし、高校卒業後東京に出てきた申請者が、故郷や都市で暮らす中での孤独感や不安感を「寂寥感」と定義し、その残滓が自身にいかん投影され作品制作に影響を与えたかを「土着の寂寥感」、「都市の寂寥感」、「芸術作品の寂寥感」などに分けて考察している。

特に、ここで問題とされている「寂寥感」とは田舎やいわゆる土着であることから生じるものではなく、都市であれ田舎であれ、人々の暮らしにある常に粘っこく横たわるものから生まれるものであることを、影響を受けた文学や日本映画における「寂寥感」についての考察から導きだしている点は実感があり、説得力に富んだものとなっている。そして、申請者のいう「残滓」が実際には濾過されたものであるのか、あるいは澱そのものであるのか幾分曖昧なきらいもあるが、問題をよく自身に引きつけ考察された論文である点が大きく評価された。

以上のように審査委員会において審査委員全員が、申請者の論文、作品ともに博士の学位に値すると高く評価し、合格とした。